

くまもと文学・歴史館報

くまもと
文学
歴史館

二〇二五年一月二九日、熊本日日新聞一面に掲載されている男女二人の写真に目が吸いよせられました。女性の

方はどうも私らしい。三面を開くと「くまもと昭和100年」「2016年1月28日『くまもと文学・歴史館』オープン」と。男性の方は浜畑賢吉さん。井上智重館長原案の舞台劇『アイラブくまもと 漱石の

四年三ヶ月』の漱石さんに扮したお姿でした。四、五才歳上のお二人でしたが、十周年を待たずに逝ってしまわれました。

井上館長は「熊本近代文学館」のままで展示にも行きづまりが出る、と、その

の衣替えに力を尽くされました。お陰で、国宝級のものたちを無料で何回も観ることができるようになりました。

開館二ヶ月半で大地震に見舞われた熊本。服部英雄館長は「蒙古襲来絵詞」で傷ついた心をいやして欲しいと、里帰りを画策してくださいました。はねる黒鹿毛馬に跨り、萌黄緞鍔で奮戦す

る竹崎季長の姿は、勇気を与えてくれました。

里帰りといえば「文字が語る古代のくまもと」展。奈良時代に肥後の国のお役人が書いて平城京に運ばれた木の札(木簡)が国宝になって帰ってきました。五十数年前東京で日本古代史を



文・歴ばあばの しあわせ

福嶋 美和子

(くまもと文学・歴史館
協議会委員)

木簡たちが戻って行く日、「木簡ロスになりそうです」と申し上げてしまいました。木簡ロスを慰めてくれたのは、「熊本県公文類纂」と顕光院益姫さまでした。

多くの方々の力によって守られてきた古文書「公文類纂」。一五〇年前の神風連の乱の生々しい記録もしっかりと残されています。調査をやっていたと聞く曾祖父の名が載っていないか調べてみたいと思います。その複製本は図書館で閲覧が可能です。歴史好きにはたまらないことです。

展示室3は熊本藩十代細川斉護公の

第11号 目次

巻頭言 福嶋美和子(くまもと文学・歴史館協議会委員)	1頁
企画展等報告	2頁~4頁
リレー展示・収蔵品展・小泉八雲イベント報告	5頁~7頁
学校連携事業・友の会事業・佐藤信館長講演会報告	8頁

正室益姫の御小座敷だったところ。ガラス張りの前は桜と楓。春の桜、秋の紅葉を楽しんだ後は、水鳥の遊ぶ池の向こうに大きな山茶花がたくさんの花を咲かせてくれます。十年前は竹藪がはびこっていましたが、いろいろな方の手によってきれいになり、小さな祠も守られています。部屋には「NPO法人熊本マンガミュージアムプロジェクト」によるマンガコーナーがあり、およそ二ヶ月ごとに入替えがあります。マンガを手を庭を眺めると、おとなりの「こども本の森熊本」に来ているのでしょうか、孫と同年の十才くらいの子が三人、じゃれ合うようにかけていきました。彼女たちが百才になる二十二世紀も、充実したくまもと文学・歴史館でありますように。

福嶋美和子(ふくしま みわこ)
東京女子大学史学科(日本古代史専攻)卒。くまもと文学・歴史館協議会委員、熊本県行政文書等管理委員会委員、元熊本県文化財保護審議会委員、元夏目漱石内坪井旧居館長。

企画展

起爆する運動体 没後30年 谷川雁のものがたり

期間 令和7年8月1日〜9月15日
会場 展示室1



戦後復興期の日本において、ことばによって人びとを奮い立たせた詩人・思想家の谷川雁。その没後三〇年にあたり、雁が発したメッセージの魅力や可能性を再確認する企画展を開催した。福岡市文学館、谷川雁研究会（代表：松本輝夫氏）、株式会社ラボ教育センター、ものがたり文化の会などの協力を得て、貴重な自筆資料や著作、当時の写真など約六〇点が並び、北海道や沖縄、四国を含む日本全国から五、二六九人が来場した。

展示ははじめに雁本人が自分につけた法名「流水院盤石居士」を示し、『流水』と『盤石』を、その人生のキーワードとして紹介した。続いて雁の最

初期の文章が掲載された旧制県立熊本中学校や第五高等学校の校友会誌などを展示。ことばや物語に魅せられた子ども時代が、同時に戦時下であったことにも触れた。



第一章は「詩・思想・闘争」をテーマに、詩人・思想家としての出発から、詩と訣別していくまでを、筑豊炭鉱での運動や雑誌『サークル村』とともに紹介した。雁がその頭角を世に現した「原点」であり、その活動の「綱領」ともいえる代表的評論「原点が存在する一は、福岡市文学館が所蔵する貴重な自筆原稿（全九枚）」をすべて見える形で公開。また、全文を活字にして掲示したところ、熱心に読みふける来館

者の姿が見られた。雁が上野英信や森崎和江らとともに各地のサークル運動を横につなげようと、昭和三年筑豊で創刊した雑誌『サークル村』は、全三冊を年代順に一望できる形で展示。毎号表紙を変え、力を込めて編集された一期から、安保闘争ピーク時の中断、ガリ版刷りの二期への変遷をたどった。

第二章は雁の新たな課題である「子ども、ことば、物語」に着目。筑豊の闘争を見届けて上京した雁が、ラボ教育センターの最高幹部として子どもたちの言語教育活動に携わった時期を紹介した。一般メディアへの執筆を断っていたこの一五年間は、これまで「沈黙の時代」として扱われてきた。本展ではこの間の活動に注目。創作や翻訳を通じて子どもたちを「起爆」する新たな雁像に迫り、ラボライブラリーと呼ばれる教材（絵本やCD）のうち、雁が製作したものなどを紹介した。

第三章は「宮沢賢治とへ十代」。長野県の黒姫に転居した雁が、賢治作品をもとに始めた独自の文化活動に焦点を当てた。賢治作品を集団でよみ表現する「人体交響劇」に関する文章のほか、合唱曲「白いうた 青いうた」の自筆原稿を展示した。会場では、合唱経験を持つ来館者からうたごえが飛び出す一幕も見られた。

会期中には、谷川雁研究会から松本輝夫氏、仁衡琢磨氏を招いた記念ダブル講演会「今こそ改めて谷川雁の言葉

と生き方を」を開催、館公式YouTubeでの後日配信も実施した。
(片桐まい)



本展の解説パンフレットに論考「谷川雁詩集『大地の商人』の再版事情―九州と東京の間で」を寄稿いただいた東京外国語大学教授の米谷匡史先生が、令和七年一〇月にご逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

企画展

お姫さまのひみつ 顕光院 益姫と砂取細川邸

期間 令和7年10月3日〜11月16日
会場 展示室1



くまもと文学・歴史館の敷地には、明治時代、熊本藩一〇代藩主 細川斉護の正室 益姫（のち、顕光院）が晩年を過ごした砂取細川邸があり、現在はその庭園が当館の南側に遺されている。当館では開館以来、益姫と砂取細川邸に関する調査を進め、庭園の眺望を楽しむ展示室を設けて、その魅力を発信してきた。令和七年に益姫の没後一五〇年を迎えるにあたり、改めて益姫の生涯と砂取細川邸の歴史を多くの方に知っていただくため、企画展を開催した。特別協力に公益財団法人 永青文庫、熊本大学永青文庫研究センター、熊本大学附属図書館（敬称略、五十音順）。展示資料点数は三一点（うち公

益財団法人 永青文庫蔵（熊本大学附属図書館寄託）（以下、熊寄）二五点、個人蔵五一点、熊本県立図書館蔵一点。

【展示内容】

益姫は、一八〇六年（文化三）一月一日に広島藩主・浅野斉賢の娘として生まれ、二〇歳の時に細川斉護の正室となった。五三歳で夫を亡くし、剃髪して顕光院と号した。五六歳で熊本へ移り住み、一八七五年（明治八）七月二〇日に没した。展示では、幕末から明治に至る、激動の時代を生き抜いた益姫の生涯をたどることで、大名家の姫の一生とはどのようなものだったのかをひもといた。

第一章「お姫さまの結婚」では、益姫と細川斉護の結婚に焦点を当て、熊本藩での婚礼準備の記録や、益姫が暮らす「奥向」の男女役人に関する規則書などを展示した。細川家は、益姫の食事や担当医師などについて細やかな配慮をしており（「御縁組一件帳」「益姫様御引越一件帳」熊寄）、益姫の生活に必要な経費負担（「寛書」熊寄）などについても、浅野家と綿密な調整を行っている。

第二章「お姫さまのやくめ」では、



益姫が大名家の正室として教養や技芸を磨き、藩主の子を出産・養育する姿に着目した。益姫が最初の子を妊娠した時には、着帯にあたり、食べてよい食材と避ける食材が書き上げられており（「御前様御袖留御着帯御誕生一件帳」熊寄）、正室の妊娠・出産に入念な配慮がなされたことがわかる。益姫が夫・斉護の死後に剃髪した際は、娘の勇姫と喜久姫（養女）が母・益姫の長寿を祈り寿いで和歌を詠んでおり「勇姫筆 和歌短冊」「喜久姫筆 和歌短冊」いずれも熊寄、益姫が子どもたちと心を通い合わせていた様子もうかがえる。

第三章「熊本にきたお姫さま」では、一八六三年（文久三）二月に益姫が熊本へ移り住んでから亡くなるまでの暮らしを取り上げた。特に、小粥祐子氏（崇城大学工学部建築学科准教授）にご協力いただき、明治七年四月「砂取御邸絵図」（熊寄）をはじめとする砂取細川邸の建築関係資料を調査した結果、砂取細川邸が二階建てであることなど、新たな知見を得ることができた。また、熊本における益姫の奥女中の任免に関する記録（「御女中一卷帳」熊寄）や、御附役人の家に残された益姫ゆかりの調度品・絵画（いずれも個人蔵）など、益姫と熊本の人びととの関わりを示す資料も展示した。

第四章「お姫さまのお庭」では、展示室3で砂取細川邸庭園の眺望をご覧いただいた。

【来館者の反響】

来館者アンケートでは、「幕末のリアルなお姫様の暮らしの一部が知れてよかった」「楽しかった」などの感想が寄せられた。入場者数は四、六七八人。

【関連イベント】

（1）記念講演会

《演題》顕光院 益姫の国許すまいるの丸御屋敷と砂取細川邸
《講師》小粥祐子氏（崇城大学工学部建築学科准教授）

《日時》10月26日13時30分〜15時
《場所》熊本県立図書館3階大研修室（参加者58名）
（2）講座
《演題》顕光院 益姫と細川家の奥
《講師》深瀬はるか（当館）
《日時》10月19日13時30分〜15時
《場所》熊本県立図書館3階大研修室（参加者52名）

（3）ギャラリートーク
①10月4日13時30分〜14時（参加者25名）、②11月2日13時30分〜14時（参加者10名）

【関連発行物】
展示解説パンフレット（日本語、A4、八頁）

（深瀬はるか）



企画展

神風連の事件簿

150年目にひらく 士族決起の記録

期間 令和8年1月23日〜3月8日
会場 展示室1



明治九年(一八七六年)の神風連の決起から一五〇年の節目に、熊本県公文類纂の中から「事変 神風党」9冊および事件に関連する行政文書をひもとき、明治の日本、熊本を揺るがした士族の決起事件を紹介する展示を行った。

第1章「神風連と明治9年の熊本」では、神風連や時代背景の紹介として、神風連に影響を与えた国学者林桜園の日記「安政五年戊午日記」(熊本県立図書館寄託)や「奉教趣意書(複製)」(くまもと文学・歴史館蔵)、廃刀令徹底の布達、散髪令に対する教師の意見書などを展示した。

第2章「決起、展開、収束」では、まず、事件発生時に県庁護衛に駆けつけた巡查らの名簿「各営本庁馳付着到」、明治初年に使用されたとされる「警杖(棍棒)」(熊本県警察学校蔵)、鎮台司令長官種田政明の襲撃を描いた錦絵「西海暴動電信紀聞」(熊本博物館蔵)などを展示した。次に、いわゆる学校党の首領であった池辺吉十郎の日記「明治九年丙子日記」や、「事変 神風党」から細川家北岡邸で起きた神風連とその他の熊本士族との接触が分かる資料を紹介した。その他、神風連決起者である太田三郎彦の脚絆や小物入れ(熊本博物館蔵)、熊本鎮台の指揮をとった児玉源太郎陸軍少佐関連の資料を展示した。児玉源太郎につ

ては、皇居三の丸尚蔵館から児玉源太郎肖像写真の画像を借用してパネルを作成し、展示した。最後に、神風連が秋月の士族と連携していたことが分かる資料や事件発生から熊本県庁がどのような対応をしていたのか時系列で分かる熊本県庁日記の草稿などを展示した。

第3章「事件のあと」では、神風連参謀の一人である緒方小太郎の供述調査や鎮台司令長官種田政明を襲撃した部隊のリーダーである高津運記の判決文を展示し、事件の終焉を紹介した。また、神風連の事件の際には捕縛する側で働いていたが、約4か月後の西南戦争で西郷軍に加わり、「賊」などと朱書きされて報償対象から削除された者がいることが分かる資料を展示した。明治九年から一〇年にかけての熊本県の混乱ぶりがよく伝わる資料であった。また、その他の公文類纂の中から、熊本県から山口県へ決起士族の家族救助に関する新聞記事の問い合わせをしたことや、熊本でも決起者家族へ扶助金を支給したことが分かる資料などを展示した。

第4章「描かれる神風連」では、様々な小説や戯曲等に描かれた神風連の文学作品や原稿等を紹介した。

のぞきケースでは、今回展示会のメインビジュアルでもあった錦絵「熊本県下賊徒退治之図」を展示し、色彩豊かな錦絵を間近で見られるようにした。



記念講演会、展示担当者による中高生向けの記念講座やギャラリートーク(二回)を実施した。

「事変 神風党」の存在や神風連の事件について広く周知することができ、あわせて熊本県公文類纂の価値についても高めることができた展示会となった。

(畠中大典)

リレー展示「戦後80年」

第二次世界大戦の終結から八〇年。戦争の現実と、戦時下に生きた人びとのおもいを収蔵資料からたどってもらおうと特設コーナーを設置、リレー展示を実施した。展示の内容は次の通り。

〈内容〉

- 第1回 戦時下の人々と報道 5/31 6/26 『写真週報』241号(1942年10月7日)
- 第2回 墨塗り・切り取り教科書 6/28 7/24 『よみかた三』(1943年) / 『改訂新女子国文 四年制巻八』(1941年)
- 第3回 1945年8月15日を境に劇的に変化した県民の生活方針 7/26 8/28 『八月ノ常会徹底事項』(1945年8月)
- 第4回 竹崎有斐と戦争 8/30 9/25 竹崎有斐色紙/自筆原稿「にげだした兵隊 原一平の戦争」
- 第5回 戦時下の汀女 9/27 10/30 『花影』 / 『中村汀女 汀女自画像』
- 第6回 上妻博之と秉燭雜録 11/1 11/27 『肥後藩切支丹之系統 上巻』 / 『上妻博之集 一「帆足長秋と写本」』



収蔵品展 アーカイブズシリーズ

アーカイブズに見るくまもと26

期間 令和7年3月26日〜5月11日

◆古文書のいろは

江戸時代の文字文化を楽しむ



古文書に親しみ、歴史を身近に感じてもらえるように、江戸時代の文字や文章の、今との違いやルールを分かりやすく解説し、相良藩主正室みさが夫に送った書状(相良文書)などから、懸命に、豊かに生きていた江戸時代の人びとの生の声を紹介した。

◆生誕140年 劇作家・長田秀雄

近代演劇草創期の活躍

文学分野では、生誕140年を迎えた、県ゆかりの劇作家、長田秀雄について紹介した。秀雄は、明治期に演劇の近代化を目指して生まれた「新劇」の礎づくりに参加し、発展を支え、当時の様子を記録してきた。その活躍を



自筆原稿等の貴重資料とともに展示した。

◆アーカイブズに見るくまもと27

期間 令和7年5月28日〜7月13日

◆没後240年

『鳳凰』 細川重賢と宝暦の改革



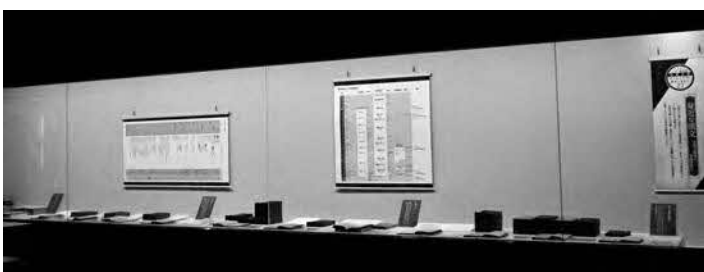
江戸時代中期、財政難に苦しむ熊本藩で「宝暦の改革」に取り組んだ細川

重賢について展示を行った。人事改革に始まり、司法、教育、土地制度など多岐にわたる改革を行ったことが分かる資料を展示した。改革は身を結び、重賢は名君「鳳凰」として全国に名を広め、その影響は明治の司法改革にも表れることなどを紹介した。

◆身近な漢文

永青文庫寄託漢籍資料から

当館に寄託されている永青文庫所蔵漢籍資料を紹介。細川重賢と会読した際に側近が使用した『三國志』や、『有備無患』(備えあれば患いなし)「五十歩百歩」など故事成語の由来となった文章を紹介し、来館者に漢籍や漢文を身近に感じていただく機会と



アーカイブズに見るくまもと28

期間 令和7年12月3日

令和8年1月29日

◆書籍に見る小泉八雲の世界



NHKの朝の連続テレビ小説で小泉八雲の妻・セツをモデルにした「ばけばけ」が放送されるのに合わせて展示会を開催。第五高等学校(現熊本大学)で教鞭をとり、約三年間、熊本で過ごした八雲の魅力を紹介した。第一章「イラストレーター小泉八雲」では、アメリカでの新聞記者時代に書いたイラストや『小泉八雲秘稿画本 妖魔詩話』に掲載されたイラストを書籍とともに紹介。第二章「小泉八雲がいた頃の熊本」では、県庁の歴史的公文書「熊本県公文類纂」を展示し、八雲と関わりのある明治期の熊本を紹介した。第三章「作品に描かれた小泉八雲」では、八雲について息子一雄が書いた自筆原稿や、八雲を描いた伝記、小説、マンガなど様々な作品を紹介した。特別資料として、八雲と帝国大学教授チェンバレンの往復書簡を展示した。

収蔵品展「書籍に見る小泉八雲の世界」関連行事

収蔵品展関連行事として、図書館・本の森熊本との三館連携で「大人のお話会」を1月12日に開催した。

ダブル講演会「小泉八雲とチェンバレン」を令和8年1月10日(土)熊本県立図書館大研修室で開催した。講演主旨を以下に紹介する。

講演1

「ヘブン先生のモデル小泉八雲」

鶴本市朗(本展担当)

小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)は、一八五〇年、ギリシャのレフカダ島で、アイルランド人の父とギリシャ人の母の間に生まれた。二歳の時にアイルランドへ移るが、のちに両親は離婚し、大叔母サラ・ブレナンに養育される。一八六三年、イギリスの神学校に通うが遊具で事故に遭い左眼を失明する。大叔母の破産のため、学校を中退。働き始めるが苦しい生活を送る。一八六九年、新天地を求め、アメリカ・シンシナティへ移るがそこでも苦しい生活が続く。印刷屋ヘンリー・ワトキンと出会い、仕事を教えられながら二年間を過ごし生活の安定が生まれる。図書館に通い、勉強をし、新聞の投稿を行う中で認められ、一八七四年、新

聞社シンシナティ・エイクワイアラ社の正式社員となる。記者として活躍を始めていたが、翌年、下宿で賄いをしていたアリシア・フォリーと結婚を考えた。式を挙げる。当時の州法では白人と有色人種の結婚は認められておらず、新聞社での立場を失い、結婚生活も破綻、ニューヨークへ生活の場を変える。移転当初、病気になる。職も失い餓死寸前まで困窮するが、周りの助けもあり、アイテム社で準編集者の職を得る。一八八〇年には、風刺画入りの記事を執筆し、記者としての文名が上がっていく。翌年、合併で生まれた新しい新聞「タイムズ・デモクラット」紙の文芸部長に迎えられる。編集長の理解を得て、自由なテーマで執筆に専念できるようになる。一八八五年、万国博覧会の記事を書き、日本館の展示を見て、大いに興味を抱く。その後、マルチニーク島、ニューヨークへと移り、一八九〇年、滞在記の執筆のため、日本へ。帝国大学教授・チェンバレンの紹介で、松江の島根県尋常中学校の教師の職を得る。中学校教頭・西田千太郎との出会いもあり、初めての教師生活を充実していく。翌年一月、松江を襲った寒波のため病に伏す。看病と身の回りの世話をするため小泉セツが



雇われ、のちに夫婦となる。六月、土族屋敷(現小泉八雲旧居)を借り、新生活を始める。チェンバレンの紹介で第五高等学校の職を得、一八九一年、熊本へ転居する。熊本へはセツの家族も伴い、手取本町の家(現小泉八雲旧居)に住み、大所帯の生活となる。翌年、坪井に転居し、そこで長男・一雄が生まれる。一八九四年、ハーンが海外に日本を紹介する最初の書籍『知られぬ日本の面影』が出版される。その年の十月、熊本を離れ、神戸クロニクル社の新聞記者となるが、過労のため、翌年一月に退社する。一八九六年、二月、帰化手続きを終え、小泉八雲と改名する。九月、帝国大学文科大文学講師となる。一九〇三年、学長より解雇通知を受け、学生たちによる留任運動に発展する。一九〇四年三月、早稲田大学文学科講師となる。四月、『怪談』を発売。九月、心臓発作を起こし死去。彼の死を悼む人々の長い葬列に見送られた。

講演2

「日本研究をリードした

チェンバレン」

佐藤 信(くまもと文学・歴史館長)

バジル・ホール・チェンバレン(一八五〇〜一九三五)は、イギリス南海岸ポーツマス近郊の貴族の出身で、父も海軍少将として琉球・日本を訪れている。

一八七三年(明治六)に来日し、翌一八七四年から八二年まで東京の海軍兵学校英語教師をした。一八八二年に『古事記』の英語訳を完成した。神話も含む古典文学の英訳には苦勞があったと思われるが、世界に日本の歴史文化を紹介し広める上で大きな役割を果たした。一八八六年からは東京帝国大学の外国人教師となり、日本人の大学生相手に、国語学(日本語学)を講義した。教え子の上田万年はじめ日本人学生たちに国語学(日本語学)を教え、日本における国語学(日本語学)草創に大きな役割を果たした。一九一一年に離日するが、東京帝国大学はじめての外国人名誉教師となっている。教え子たちから慕われ、晩年スイスのジュネーブで病氣療養したころには、東京帝国大学国語学の日本人教え子たちが、競ってお見舞いに訪ねている。

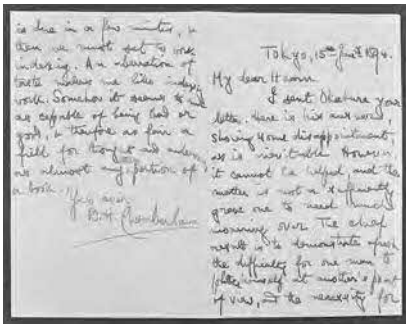
またチェンバレンは琉球研究や北海道のアイヌ語研究にも大きな足跡を残しており、柳田国男は『海南小記』の序に、ジュネーブでは会うことができなかった「琉球学の先達チェンバレン先生にこの書をささげる」旨を記している。

ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)(一八五〇〜一九〇四)も、チェンバレンの翻訳『古事記』を読んで来日した経緯がある。一八九〇年にアメリカから出版社通信員として来日し、のち松江の島根県尋常中学校・師範学校の英語教師となったことは、NHKの朝の連続ドラマ「ばけばけ」でよく知られる。一八九一年には松江で小泉セツと結婚し、チェンバレンの紹介で熊本大学前身の第五高等学校(第五高等学校)の英語教師となる。一八九四年神戸クロニクル社に移り、のち一八九六年東京帝国大学文科大学の講師となる。一九〇三年に東京帝国大学を退職し、後任が夏目漱石だった。一九〇四年に早稲田大学の講師に迎えられるが、この年五四歳で亡くなった。

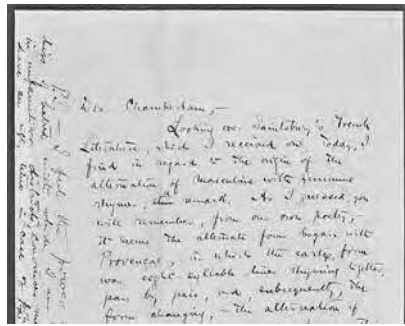
ハーンは、チェンバレンの紹介で五高や東京帝大の英語教師となるなど、同僚としても二人の交流は深いものがあった。熊本県立図書館には、ハーンからチェンバレン宛てに英文で自筆した一八九四年の手紙があり、くまもと文学・歴史館で展示を行った。チェンバレンもハーンも、日本研究や日本文化の国際発信に大きな役割を果たした恩人であり、同時代に生きた二人の交

流の跡を示す生の史料として貴重といえよう。

展示資料紹介



チェンバレン自筆書簡(部分)ハーンへの返信
明治27年(1894年)1月15日付
くまもと文学・歴史館蔵



ラフカディオ・ハーン自筆書簡(部分)
明治27年(1894年)チェンバレン宛
くまもと文学・歴史館蔵



博物館実習

学芸員資格の取得を目指す大学生を対象とした博物館実習を、8月21日〜8月29日の日程で実施した。今年度は県内外から3名が参加し、当館における貴重資料の取り扱いや資料の修復に関すること、資料を保存していくための環境の維持管理についてなど、学芸員の実務を現場で学んだ。展示実習では実習期間に開催していた企画展「起爆する運動体―没後30年 谷川雁のものごと―」に関連し、雁らが創刊した雑誌『サークル村』を一から検討。調査結果をもとに解説パネルやキャプションを作成した。実習の最終日にはガラスケースに『サークル村』復刻版を展示、ギャラリートークも行って、実習の総仕上げとした。

学校連携事業

熊本大学教育学部附属中学校二年生と当館で連携した歴史の授業を実施した。「江戸幕府はなぜ滅亡したのか」をテーマとして、クラスごとの発表、意見交換が行われた後、専門家からの意見として当館からの発表を行った。生徒たちの感想には「そういう視点もあるのか」や「展示会について資料を見てみたい」といったものが寄せられ、生徒たちに刺激を与え、当館の存在を周知する機会にもなった。

熊本県立岱志高校定時制とは木簡に関する授業における連携を試みた。生徒から集められた木簡に関する質問を佐藤館長に投げかけ、回答をもらった。その様子を動画で撮影しておき、定時制の授業において視聴した。専門家の意見を聞くことで、生徒たちは新たな学びを得ており、当館としても遠隔地の学校との連携を検討できる一例となった。



友の会事業

◆定例事業

○月案内発行 くまもと文学・歴史館の行事等を会員へ送付。

○文章勉強会 毎月一回開催。有志による文章講座。

○歴史勉強会 毎月一回開催。有志による古文書講座。

◆湧水発行
○会員の作品を集めた文芸誌「湧水」の三十三号発行。

◆今年度の主な事業

○5月10日 友の会総会

(佐藤信館長による記念講演会 演題「大仏開眼 聖武天皇が大仏に夢見たもの」)

○奇数月(5、7、9、11、1月) 短歌講座 講師・阿木津 英氏

○8月31日 湧水講演会 演題「『雪女』から『夕鶴』へ」小泉八雲と木下順二との接点」

講師・永田満徳氏ほか

○11月5日 秋の文学・歴史バスツアー

(震災遺構、四賢婦人記念館、横井小楠記念館、徳富記念園方面)



佐藤館長連続講演会

古代史研究の第一人者である佐藤信館長による三回にわたる連続講演会を開催。古代日本が、列島や東アジアの歴史と密接に交流しながら展開した様相について、最新研究の成果も交えながら、具体的な解説があった。また、くまもと文学・歴史館 YouTube チャンネルにおいて、各回の講演会動画の配信を行った。

第1回 6月14日(土)

演題「上野三碑と渡来人」

第2回 9月13日(土)

演題「長屋王と交流」

第3回 12月20日(土)

演題「遣唐使の交流」



くまもと文学・歴史館のご案内

所在地

熊本市中央区出水2丁目5番1号
(熊本県立図書館併設)

電話(096) 384-5000(代)

開館時間

午前9時30分～午後5時15分
休館日 火曜日・毎月最終金曜日
年末年始・特別整理期間

入場料

無料
最寄りの交通機関
(1)市電Ⅱ「市立体育館前」下車・徒歩5分
(2)バスⅡ「水前寺公園・県立図書館入口」下車・徒歩5分

文学・歴史館友の会会員募集中

この会は文学や歴史に関心のある人々の自主的な集まりです。くまもと文学・歴史館を核として、文学・歴史愛好者の大きな輪を作りたくて願って組織するものです。詳しくはくまもと文学・歴史館受付へお問い合わせ下さい。

くまもと文学・歴史館報
第11号
令和8年(2026年)
3月31日発行
編集発行 くまもと文学・歴史館
〒862-8612
熊本市中央区
出水2丁目5番1号
電話096-384-5000(代)
FAX096-385-4214